介護の中で医療の分野を積極的に

旭川市医師会
吉野耳鼻咽喉科医院　吉野　成一

今、医療を取り巻く環境は複雑になってきた。昔、お医者さん、お医者さんで、医療全般は、良きにつけ悪しきにつけ、まず医師に相談の《よろず相談》の時代があったけれども、現代は近代医学云々で、医学も多種多様になったこともあって、専門志向と言えば聞こえは良いが、いつの間にか垣根ができて、これは医療の分野でやった方が良いと思うものまで、いつのまにか侵害されていく分野が増えている。

これも時代の流れさ、とうそぶいてばかりはいられなくなったようだ。

その一つに混合診療も挙げられるだろうが、これも打つ手が遅かったように思う。さてまた、介護もしかりだと思う。いつの間にか、《医療の外で医療まがい》のことが行われて巨大化して、気が付いた時は介護エリアで、これは当然医療分野の範疇だと考えられるものまでが、医療から除外されている。第一、介護保険が施行された時、計画当初、実施段階より〔有限会社〕参加で過剰、無差別参加が主流になること、不適格施設の乱立が予測できただけに、地域医療、福祉を担う医師会として検討、助言していくべきだったのでは、と思う。また、介護福祉専門員の過剰増加も厚生労働省の無策〔福祉に関係ない人まで資格をあたえ、今、資質を疑う、公正中立を疑うで、18年度に一部首を切る方式を考えるなんて、頂けない〕によるものである。

今回、現状と課題として厚生労働省があげた、介護保険の中で医療関係費は３パーセント弱、厚生労働省の担当者が医療サービスがほとんど入っていないのは何故とも問いかけているし、また、見直しの具体的内容〔主なポイント〕の一つに、医療と介護の関係と取り上げている。医師会としては、この機会に、介護保険を真正面から取り上げて、十分な討議の上、医療を介護の分野でも取り上げて頂きたいと思います。

例えば、介護の中でリハビリを重視してこそ、高齢利用者の機能回復、介護度アップに繋がる道、これは、医師の見識では当然のこととなると、ディサービスよりディケアを増やす方針をとなり、このようなアドバイス、実践ができる医院関連の施設には、優遇処置として有限会社と区別しても良いと思う。しかし現行では、一部、このリハビリが医師の手を離れて、看護師でも良いということがまかり通るような〔ルール〕が作られ、この形式であれば介護保険の中で、リハビリ設備無しでも〔リハビリ〕料金を請求できる。それが、リハビリ設備はあっても、医師参加では請求できないという〔オマケ〕まで付いては、〔なにをかいわんやではないか〕。これ一つとっても、医師会として早急に対応して頂きたい。

医師として、介護の中でリハビリに一番ウエイトをかけてプランニングすると、それは駄目との指導。旨い食事、リラックス入浴を売り物、これが主流だろうが、それよりも利用者の機能訓練があって、日常生活に復帰させる指導こそ大切ではないのか。やはり、理論欠落、疑問が残る。

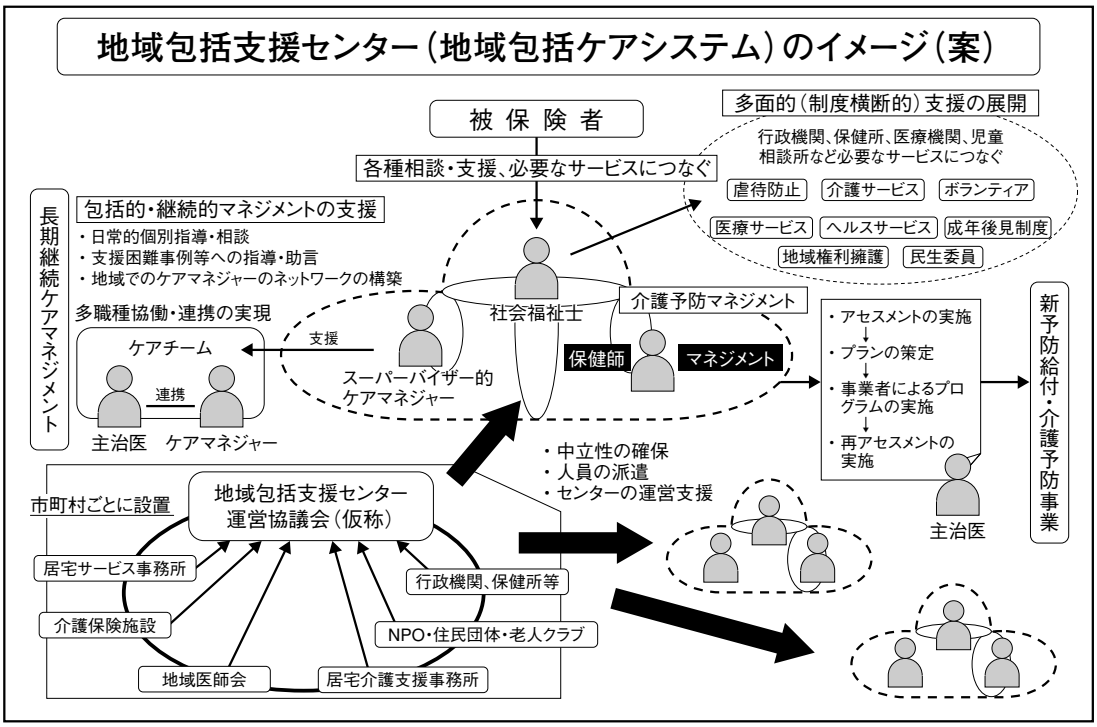
18年度、介護保険改革の大きな目玉として、地域包括支援センター〔地域包括ケアシステム〕がある。(別添図参照)。

これは、今のところ構想段階であるとのこと。ただ、２名の〔保健師〕を中心にマネジメントさせる構想だとのこと。

私は、「保健師が悪い良いというのではなくて、信頼も、情熱も、知識もある医師がいれば、問題

なくガバナリビティーを発揮しやすい、グループの纏まりも期待できるから、まず〔かなめ〕としていろいろの資格を与えられた医師を考えて欲しいと思います。」と申しあげたところ、厚生労働省の室長は、「決定ではありませんので」と言うことだった。この問題も、医師会レベルで、介護も医療の１つの柱として必要、健全な発展させるために、医師の積極参加を是非進めて頂きたい。

介護保険の中には、小さいことだが、医師会レベルでなければ修正できない問題が多々ある。18年度に改定スタートと、期限を定められているので、急ぎ検討参加することを期待しています。



韓国考古学者李鍾恒（イ チョン ハン）が記紀の謎に迫る

小樽市医師会 野口病院　本間　勉

1.「倭人」と「倭国」について

李氏は大学教授・高等教育局長・国民大学学長を歴任し、著書多数の古代史研究の第一人者である。教授以来学長停年退職後（1984年）も次の問題の調査検討に没頭している方である。

“中国史（三国志の魏志倭人伝）、および隋書・旧・新唐書・宋書等や韓国史（三国史記の百済、新羅の倭国伝）に詳細に記録されている数多くの史実が、日本の国史「日本書紀」や古事記に一行も記載されていないという不思議な謎の解明に10年以上の歳月も努力され今尚継続されている日本通の考古学者でもある。参照にした1989年李氏著『韓半島からきた倭国』を中心に李氏の説明を述べてみる。

「日鮮同祖論」（金沢庄三郎著）

李氏もこの説を支持するばかりでなく強く主張分析している。即ち古代日本列島の原住民はいわゆる“倭人”と言われていたが、実際は韓国半島南部に多数居住していた「加那人」（同民族で血統・言語・文化・食事・習慣等も同一）が倭族又は倭人とも言われ、集団として多くの地区にいたが、その中でも進取的で勇敢な集団（若干加那人と異なる人々）が弥生時代に稲作文化や鉄製品を持って島伝いに（対馬・壱岐・沖ノ島等）北九州に渡来し、肥沃な土地と砂鉄の豊富さ・海陸物産

の多用さ豊かさに魅かれて次々と渡来する者多く、原住民と混血融合してその協力により“北九州王朝”という政治的民族集団を築いた。倭人（倭族）主体なので「倭国」と言った。これが“天孫降臨”ということであろうと言う（加那族＝倭族＝天孫族）。この倭国は後世の卑弥呼女王（30カ国共立）の治める邪馬台国の前身でもあると李氏は言っている。

2．「大和王朝」（日本人の日本国）の建国

北九州王朝の一分派（支流）が大和（奈良・飛鳥）の小地域に築いていた小国（クニ）の発展のため少なくとも3次の東遷を果して王朝を築いたという。

①“7・5・3説”又は“三神説”

- 7・5・3説…7世紀・5世紀・3世紀に3回東遷した。
- 三　神　説…神武・崇神・応神の三天皇が東遷した。

②この3次の東遷で周囲の部族を征服したばかりでなく多くの小国や部族を征服して7世紀中期には九州王朝までも併合して日本列島を支配して「日本国」となったという。恐らく天智・天武天皇の時代らしい。

③7世紀中頃までは九州王朝は細々ながらも存在していたらしいという。

④それまで北九州王朝が本家国で大和王朝は分家国であったわけである。

3．「三韓征伐」

日本書紀によれば西暦200年（日本では320年に当る）に第14代仲哀天皇が妃神功皇后と共に九州熊襲征伐に来たが、不幸にも天皇が矢に当って戦死した。熊襲の抵抗強力なのは背後に新羅がいると考え神功皇后は、身重の体で大船団を率いて玄界灘を渡って新羅に進行し、征服して全土を大和朝廷の御用牧場としたという。高句麗と百済の王が日本勢の強力な軍隊に恐れをなして降伏し“内官家屯家（ミヤケ）”を献上したと日本書紀にある。しかし、三韓の歴史にはこの史実は全く記録がないし、仲哀・応神天皇の記紀の史実は少ない上に謎が多く天皇も神功皇后も架空の人になって来た。若し実在したとすれば大和王朝の人でなく北九州王朝の人で母子（神功・応神）が大和に東遷して征服し第15代応神天皇となったのであろうと李氏は言っている。

4．「広開土王陵碑」

高句麗の長寿王（414年）が先帝“広開土王”の大きな功績を後世に伝える為に建てた記念碑であり1,500年前のものである。碑文によると次の如し。

「倭以辛卯年来渡海破百残□□□羅以為臣民」

倭は辛卯年（391年）に海を渡って来て百済・任那・新羅を破って臣民にしたという。この辛卯年を起点として大和王朝を逆算すると次の通り。

4世紀半ばに日本列島は統一完成していなければならない。さもなくば12万人の軍勢と500艘の船舶を出せるわけがないし、6世紀前半までは小舟で手漕ぎであり、到底玄界灘は渡れない。

日本書紀の記事には碑文も無く出兵も無いので全く史実は不明であり謎とする学者が多数になった。しからばこの時の碑文の倭は何人なのか。恐らく南鮮に多く居住し政治的大集団をなしていた加那人（倭人）であって大和王朝・北九州王朝は関係なかったか若干の北九州王朝の援助があったかも知れない（海を渡って来たとあるので）。

1970年代に李進熙（韓国）古代史学者は「碑文石灰塗布改作説」を唱え、石灰を塗って文字を彫り変えて倭にしたという（9カ所もあるのに）。この説に賛同する韓国学者が多くなるや日本国家建国起源4世紀説が水泡に帰した感あり。古事記や日本書紀の建国史は歪曲誇張のみならず事実とかけ離れている所多く、日韓の関係も核心部分で大きく間違っているという。即ち古代日本列島を代表する一つの巨大な政治勢力は北九州（倭国）にあった。西暦紀元前・後の時代から6世紀末に至るまで韓国や中国が日本列島の唯一の国家として認証し通交した政権は決して大和王朝ではなく北九州王朝であったという。大和王朝は北九州王朝から分派して東へ出ていった支流の分派であったが勢力を増大し本家の北九州王朝を併合して日本列島を完全に統一したのは7世紀後半であろうと李氏はいっている。

5．「志賀島の金印鑑」

1784年（天明4年、226年前）九州志賀島の百姓甚兵衛が畑の溝を整理中に純金の印章を発見した。之が有名な漢の光武帝が“委奴国王”に下賜

した金印「漢委奴国王」である。「後漢書倭伝」に次のように記載されている。

「建武中元2年“倭奴国奉賀朝貢す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武賜うに印綬を以てす」(西暦57年のこと)。委奴国又は倭ノ奴国は九州の国で後の邪馬台国連合30カ国の一つであり、志賀島も九州博多であるので北九州王朝と関係深いといって委奴国とは読まないという（記紀には記録ない)。

6.「天孫降臨」とは

①天孫族とは…イザナギ・イザナミと7人の子と(天照大神は4女で神武天皇は7代の孫)、その他多くの部族と共に南鮮の加那人（同族・倭人）達と弁韓や任那政治集団地に多く居住していた。

②降臨とは…政治集団指導者（部族長）が聖山に降り（昇る）国王となり国を造る（三韓神話との共通点である)。三種の神器（刀・宝玉・鏡）はその時の王の証左となる。

降臨経路は高天原から天浮（島）橋を渡って日向の高千稲峯に降りる。

○高天原…南鮮の任那（日本府が後に設立されたという部族集団地）にあったという（未だ不明)。又は寒い北国から暖い南国への民族移動を降臨という。

○天ノ浮（島）橋…対馬・壱岐・沖ノ島をいう。

○日向の高千稲の峯（九州に4カ所ある)。

筑紫	日向の高千稲のクシフルタケ	(古事記)
	(日向襲の高千稲峯)	(日本書紀)
筑紫	日向の高千稲のクジフルノタケ	(日本書紀)
	日向のクシヒの高千稲峯	(日本書紀)
	日向襲の高千稲の クシヒの二上峯	(日本書紀)
	日向襲の高千稲の ソホリノヤマのタケ	(日本書紀)

③降臨地は…「此地は韓国に向い笠沙の御前を真来通りて、朝日の直刺す国夕日の日照国なり。故に此の地は甚吉き地なり」(日本書紀)

即ちここは南鮮の眞向いで気候も景色も非常に似ており誠に好ましい土地であるといっている。

④天孫族が北九州に小国らしい弱小政治集団地を設けたのは西暦前2世紀頃という。古代の民族移動と定着地確保（建国）は武力征服が主だったが、日本の国生みは男女の交ぐわい（現地人と混血）という原始的行動が主体であったという。

⑤天孫族が建国した北九州王朝は日本唯一の朝廷（倭国⇄邪馬台国）として漢時代から唐時代初期まで長い間一貫して中国・韓国と交流してきた。

7.「磐井の乱」

継体天皇22年（528年）に大和王朝は目の上の瘤（大陸交流を妨害）である北九州王朝（磐井の君）を征伐する為、大将軍物部麁鹿火の大軍を送って潰滅に近い打撃を与えた（韓国の歴史書に531年天皇・皇太子・皇子共に崩御とある)。この頃から大和王朝は弱小化した北九州王朝を傘下にしてその歴史も自分のものにしたのであろうとしている（日本書紀に記録ない)。

8.「倭の五王」

日本の古代史特に日本書紀は謎だらけで信用できない点が多々ある。即ち邪馬台国・倭の五王・聖徳太子と遣隋使国交・広開土王陵碑文・任那日本府等、之等の事柄は宋書・斉書・梁書の中国歴史書に詳細に記録されているのに日本書紀には全く記録がないのは何故であろうか。倭の五王については学者が大和王朝の天皇であろうとした。名前も年代も合致しないのに次のように考えている。

讃（応神・仁徳又は履中)・珍（反正)・済（充恭)・興（安康)・武（雄略)。仁徳（大ササギ)・履中（玄来穂別)・反正（端歯別)・充恭（雄朝津間)・安康（穴稲)・武（大泊瀬幼武）という名前なり。

讃が宋永初2年(西暦421年)御余授（位をもらう）→応神天皇32年の頃。

珍は年代不明（讃の子）　→同上？

済が宋に使臣派遣は元嘉20年(442年)

→仁徳天皇19年(519年没)頃

興が宋に奉献大明6年(462年)
武が上表奉献昇明2年(478年)　→仁徳天皇時代

結局天皇家とすると2代（応神・仁徳）が倭の五王に相当するという不思議なことになる。この

事は大和王朝とは無関係で北九州王朝の倭王の活動事項（記録は全くない）と考えざるをえないと李氏は言っている。大和王朝の天皇に讃・珍・済・興・武の一文字名の天皇は全くいないし、記録もない。（こじつけでササ→讃→仁徳、興→安康、武→幼武→雄略、その他不明という）。

９．遣隋使の謎

“隋書倭国伝”によれば開皇20年（西暦600年推古天皇代）に倭国王が隋に使臣を送って朝貢したとある。国書に倭王署名が無いので（こんな馬鹿げた事はない）文帝が使者に質問したところ、姓は阿毎（アメ）（天（アメ））で名は多利思比孤（タリシヒコ）（北孤（ホコ））であり、平素の号は阿輩鶏弥（オオキミ）であると答えている（倭王名も使者の名も不明だった）。又、政治的統治形態を問うと「兄弟共同統治形式」で“天を以て兄と為し日を以て弟と為す。兄は夜明けに出て正坐して政事（マツリゴト）を聴き、日の出になれば政務を弟に委ねる”という。

倭国伝は倭国の「内官12等」の第１位から第12位まで記録している。

以上のように隋の国史は詳細に倭国の記録をしているのに、日本書紀は一言も触れていない。不思議千万である。しかも、この時の天皇は推古女帝であり、摂政は聖徳太子である。この頃、世界的に大国と言われて恐れられていた隋に始めて使者を送るのに国書に倭王の署名もないし、使者は誰なのか、献上品は何なのか一切不明である。

倭王の名前も該当者は全く不詳であるし、兄弟共同統治形式や兄弟の政治的勤務体勢も大和王朝に全くない（記録も皆無である）。再に内官12等も603年聖徳太子が「冠位12階」を制定しているが、名称も等級も北九州王朝のものと思われるものと全く同じで順序が多少異なるだけである所から大和王朝（聖徳太子）が真似したのではないかと言う学者もいる。

倭王の名前も古くは何人か「タラシヒコ」（足彦（タラシヒコ））と男性名で第14代仲哀天皇までいたがその後は全くない。

しかも女官６～７百名をはべらせていた所から推古女帝でないことは明らかであるという。

即ち大和朝廷が派遣したとは思われないのは日本書紀に記録が全くない所からも北九州王朝の事柄であったからと考えられると李氏はいう。

10．聖徳太子の隋への国書？

隋書倭国伝によれば大業３年（推古15年607年）に聖徳太子？が大社（大使）小野臣妹子に持参させて隋の煬帝に国書を奉呈した。その文面の中に有名な「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙無きや」と書かれていたので煬帝は烈火の如く怒り“蛮夷の書無礼なる者あり、復た以て聞する勿れ”と記録されている。「日出づる云々…」は大書特筆して聖徳太子が世界の大帝国隋と対等の外交を展開した確実の証拠であると教科書に例外なく記載されていることは日本人で知らない者はいないと思う。

しかしその前文に“大業三年其の王多利思北孤、使を遣隋して朝貢す”とある。天皇家大和政権の権威と地位向上の絶好の史実を何故天皇中心に編集された日本書紀に全く記載がないのかは不思議でならない。日本書紀の片隅に推古15年７月“大社小野臣妹子を大隋に遣す、鞍作福利を以て通事とす”とあるだけである。問題は「其の王多利思比（北）孤」にあると思う。

600年、603年、607年と３回も遣隋した倭王は多利思比孤であるが国書に倭王署名がなく大使は多利思比孤が倭王であると答えているが日本の歴史書にこの名の倭王は全く存在していない。大体国書に倭王の名がないとは外交上考えられないし、架空の倭王名を告白する大使もいるわけがないと思う。多利思比孤は前述した通り比孤（ヒコ）は男性名であるし、女官６～７百名がはべるとあるから推古女帝では決してない。しからば多くの学者が言う聖徳太子か蘇我馬子かと言えばこの名が全く当てはまらない。しかも彼等が天皇をさしおいて国書を作成して大使を外国に派遣するわけがない。そこで考えられることは一つである。大和王朝にその人物が居ない以上北九州王朝の倭王であろうと。だから大和王朝主体の日本書紀には記録されなかったと李氏は言う。日本書紀編集時には隋書も参考にしているし、天武天皇の第５皇子舎人（トネリ）親王が編集長であるため、又、推古天皇まで編集した古事記の責任者太安萬侶も日本書紀編集に参加しているのに隋外交の国書や倭王名、大使名について無視して記録しないのは何故であろう

か。倭国本家の北九州王朝を併合してその歴史も自らのものとして吸収した大和王朝に関係無い不利な史実は抹殺したからではないかと李氏は言う。

しからば大使小野妹子は誰であるが何れの王朝の大使であるか不明となる。今後の検討が急務。

11.「隋倭国伝」では大業4年（608年）煬帝は小野妹子と共に使臣「裴世清」を倭国に派遣している

日本書紀には珍しく九州筑紫に両者が到着したとある。ここに2カ月も滞在してから倭王は小徳阿輩台に従者数百名を引率させて使者を灘波に案内し、10日後には大礼哥多毘が20余騎で倭国の主都大和に案内して倭王に相見させている。隋書・記紀にも倭王の名も女帝か男帝かも記録は全くないのは謎である。しかも裴世清が九州筑紫に2カ月も滞在したのに大和には1週間位しか居なかったのも不思議である。即ち九州王朝の多利思比孤に面会するのが主目的ではなかったかと疑いたくなる。そして輩世清は“阿蘇山”について詳細に報告し、倭国には「如意宝珠」があり、夜青い光彩を放つ。鶏卵大で魚の眼精だと言っているが不明である。又、新羅・百済が倭国は大国で敬仰しており、珍物が多いので頻繁に往来していると伝えている。それは地理的に見て島伝えに海を渡ればすぐ致着出来る北九州王朝の事だと見ている。

12. 旧唐書の「倭国伝」・「日本伝」

旧唐書（607年～907年・290年間時代）の有名な歴史書によれば北九州には北九州王朝の倭国があり、奈良には大和王朝の日本国があり、この2国は完全に別個の国として存立しているといっている。その後、倭国伝と日本伝の両者が記録されている（元来本家と分家なのである）。

“日本国は倭国の別種なり”と書いている。即ち近畿天皇家の大和王朝は北九州王朝から分派して出来た支派の一つであるという。その後に勢力増大した大和王朝は北九州王朝の倭国を併合して中国人が付けた日本人を馬鹿にした倭人（小さい・醜い）の国・倭国を日本国という美称に改名したという。

“倭国自ら其の名の雅ならざるを悪み、改めて日本と為す”(旧唐書)

“倭国更めて日本と号す、自ら言う日出ずる処に近し”と（三国史記）

670年天智天皇（第38代）9年のことである。そして日本列島を対外的に代表する国を日本国とした。

13.「白村ノ江（ハクスキノエ）の合戦」(660年代)

三国史記（韓国3カ国の歴史書）によると新羅・唐混合軍の百済侵略を支援するため倭国が2万7千余名の軍隊と170隻の軍船を送って錦江河口の“白村ノ江”で交戦し殆ど全滅したとあるのに、日本書紀には大和王朝が派遣した軍隊のように記録しているが全滅の状況や援軍指揮者や捕虜の事は殆ど記していない。七世紀中葉（660年代）にやっと北九州王朝を併合して“倭国”を「日本国」と改名し建国の基礎が確立したのは天智天皇時代である。この頃に2万7千余人の軍隊と170隻の軍船を出せたであろうか。恐らく全く不可能で大半は南鮮の倭人と北九州王朝（併合されていた）が派遣したと思う。それは天智10年(671年）に唐が捕虜2千人と軍船47隻を北九州に送還しているが、捕虜の中に「筑紫の君・薩野馬」→九州王朝最後の倭王らしき人が居るからという。

それ故に日本書紀（大和王朝の歴史書）には殆ど記録されなかったのだと思う。北九州海岸の防疊や土塀は大和王朝の工事になっているが、実は北九州王朝が造成したらしい。さもなくば大和王朝も天智天皇も平穏無事ではいられなかったであろう。筑紫の君の総指揮官が捕虜になり大敗した為、北九州王朝は勢力を失い大和王朝に完全に併合されるのが早くなったと思う。

14.「任那（ミマナ）日本府」

この事は韓国三国史記にも中国の歴史書にも全く出ていないし、古事記にも記録はない。唯、日本書紀と百済三書にだけ若干の記録がある。雄略8年（464年)、高句麗の大軍が新羅王都を包囲したので“任那王日本府元帥”の救援を新羅が要請したとあるが、倭国は百済救援は数多くあるが新羅は攻撃したことはあるが救援した史実は全く無い。

現に三国史記にも記録はないのである（新羅の歴史書には全くない)。任那日本府が集中的に多

く日本書紀に記録されるのは欽明天皇2年の541年から552年の13年間であるが、532年には全官加那（倭人の多い小国）が新羅に併合されたのでその復興運動が活発になった時代である。

即ち倭国の南鮮における勢力（支配力）が駆逐されつつあった時期である。南鮮一帯の中で軍事的・政治的支配権を確保して権力を握っていた地域を総称して倭国は任那と名づけ、その統治役所を“日本府”として役人を倭国から派遣していたらしいのである。倭国が南鮮に異常な執着を持ったのは邪馬台国卑弥呼女王時代からであると言い、それは鉄資源の確保とその冶金技術の習得と農耕興隆の目的であったとしている。弥生時代に倭人による鉄製の武器や農器具は大和王朝の建国を飛躍的に早期に充実化して勢力拡大・権力強大にして基礎を確固たるものにしたのは任那日本府？の存在価値が有力であったのかも知れない。

任那という国名は韓国の文献や金石文に出ているが日本府の名は全く無い。そこで日本では日本府が有ったことは事実として信じ何処にあったか実証しようと1918年（日清戦争終了後）南鮮一帯を隈なく発掘調査した。古墳百基・遺物貨車2輌（数十万点）、数千万件の盗掘を実施して見たが日本府を証明出来る物件は一点も無かったし、日本製品と思われる物品も全く無かったという。一体日本書紀の任那日本府とはどうしたのであろうか不思議でならない。日本人だけが存在を主張しているが韓国は全く認めていないのである。

15.「魏志倭人伝」（三国志の魏書）

280年陳寿著書で“東夷伝倭人の条”に約2千字にも及ぶ倭国についての詳細な記録が有名である。邪馬台国や卑弥呼女王の事、主都に至る道程・里数・政治形式や、風俗まで微に入り細にわたり紹介している。

日本書紀編集時にはこの三国志（魏・蜀・呉の三国）を参考にしている節が充分ある。その証拠に卑弥呼のモデルを神功皇后にすべく年代を繰上げているという。

邪馬台国は北九州か近畿か未だに決着を見ないし、卑弥呼は神功皇后か天照大神かと論争されてもいるが不明である。

結局邪馬台国も卑弥呼女王（30カ国王の合議で連合国共立）もすべて北九州王朝の事で大和王朝とは無関係なので日本書紀に全く記録しなかったのではないだろうかと思う。尚謎は多々あると李氏は言っている。

16. むすび

韓国の学者が一生懸命中国と韓国の国史と日本の国史（特に古代史）の史実がこの様に多々相違しているのかを調査研究しているのに日本の学者は余り熱意を示さない。

今後、中国・韓国・日本の三者が協同で検討して日本の記紀を修正して納得のゆく立派なものにしてもらいたいと熱望するものである。

表紙写真

トムラウシ山「北沼」

札幌市医師会　近藤　浩

トムラウシ山は私の大好きな山である。

北沼は頂上から化雲岳～天人峡方面に位置し約15分ほど下ったところにあり、標高は約2,000m。

北沼は旧噴火口にできた沼であり、岳人にとっては格好のキャンプ地でもある。

トムラウシ公園は北沼とは反対側のトムラウシ温泉側で、頂上より徒歩で約1時間半のところにある。小さいくぼ地に車石に似たひび割れを持つ奇岩があり、周囲にはコマクサ、コケモモ、イワウメ、エゾツツジなどが咲き乱れ、短い夏を謳歌していた。